

危険な おすそ分け



小樽市医師会
小樽協会病院

みやもと のり ゆき
宮本 憲 行

小樽に転勤になったばかりで、新緑の季節、春の山菜が旬な時期のお話です。

高齢女性が市内唯一の百貨店で買い物中に起立困難となり失神、プレシヨック状態で救急搬送されました。不整脈が散見され、血糖900mg/dl以上で、高血糖高浸透圧症候群の臨床診断で入院となりました。その半日後に同居の息子さんが、嘔気、血圧低下、失神のため救急搬送されました。二症例とも担当だったY先生は、家庭内で同じような症候が認められたことから当初の診断に疑念を抱き、再度問診の取り直しをしました。するとご親戚から新鮮な山菜(シャク)をおすそ分けいただき調理して食べたことが確認されました。このご親戚は山菜採り数十年のベテランで今までトラブルはなかったそうです。

そこから植物毒による食中毒を検索していくと、シャクはトリカブトに間違えられることがあるとわかりました。トリカブト毒はNaチャンネルオープナーで、透析で抜けにくいいため、致死性不整脈が頻発するときには経皮的心肺補助法(PCPS)が必要になることがあるそうです。

幸い二症例ともPCPSは使用せずに改善し、食中毒として治療されました。山菜等のおすそ分け慣習が残る地域は、令和の時代になり少なくなってきたのですが、善意の中に危険なものが含まれる可能性があることを認識させられる出来事でした。

仮に悪意が入っていたら、どう対応するのが適切だったのでしょうか？ 昭和の刑事ドラマにもありそうなシチュエーションで、少し悩んでしまいます。

それにしても偶発的に同じ病院に搬送され、同じ医師が対応したことによって、迅速に植物毒による食中毒の診断がついた事例になりました。もし一例ずつ別の病院に搬送され、別々の医師が対応していたら、正確な診断に辿り着くまでにはかなりの経験値を要して、とても難易度が上がったことでしょう。

今後AI診断が普及して、広く信頼される時代になり、今回のように二例のKey Wordから植物毒中毒の正解が導かれることが容易になれば良いのですが、AI診断の進化にはもう少し時間がかかりそうです。

改めて、博識のY先生の臨床診断能力に敬意を表し、新春のお年玉として少しだけでも臨床診断能力の危険のない、おすそ分けを頂きたいと心から思いました。

幸多き一年と なりますように



遠軽医師会
JA北海道厚生連遠軽厚生病院

さいとう たけ ふみ
斉藤 剛 史

北海道にやってきて16回目のお正月となった。今年のお正月も健康に生きている(と思う)。今のご時世それだけで幸運である。

17年前、北海道にやってきたのは本当に偶然だった。たまたま良かったセンター試験の結果に合わせて志望校を変更し、道内の医学部に受かっただけ、運が良かった、ただそれだけだった。

北海道に移住してくるまで、お正月はそのほとんどを家族と過ごしていたと思う。バイトや仕事をしていた年もあったが、ほとんどの年は家族と過ごしていた。大学生時代は、遠すぎて帰省するのが面倒になり、家族と過ごすお正月は2年に1回程度に減った。医者となってからは、お正月が完全に休みとなったことは一度もない。これはこれで幸運である。

北海道に来た当初、「雪が降れば冬」の感覚であった私は、冬の長さに驚いた。例年9月になると、大雪山系の山頂が白く美しく雪化粧されるのを目の当たりにしてきた。10月になると平地でも一度は雪が降り、その後根雪となる。そして、5月のGWまでは道端に雪が残っている。毎年必ずやってくるこの長い冬、何故か嫌いではない。北海道の季節が偶然好きだった、運が良かったと思う。

昨年から遠軽に転勤となり、遠軽での冬を過ごした。遠軽の冬も寒く、雪もしっかり積もる。世の中は流行している感染症のため、一昨年の冬もまだいろいろと“stay home”制限がかかっていた。寒いし雪だし、そのうえ“stay home”となつては、気分的には家で過ごそうとなっていた。しかしながら、幸いにも、私には外に出る理由ができた。車で10分のところに、きれいなスキー場が新設されていたのだ。北海道の人になったのだから、いつかスキーができるようになりたいと思いつつ、その重い腰をあげられずにいたが、やっとあがった。ひとりぼっちなので感染対策も万全、幸運だった。

この「新春随想」の原稿執筆依頼を頂いたとき、それまでの1年間は、落ちたり、下がったり、ぶつけられたり、そっぽ向かれたり、まあ、踏んだり蹴つたりの1年間だった。それでも、なんとかかんとか過ごしてきた。いつかこの1年も幸運だったなと思えるようになりたい。まずは、今回執筆者に選ばれたことは幸運でした。ありがとうございました。